

# SARS 流行の北京で過ごした体験記

## ~転んでも唯では起きない根性の発揮~

社団法人 やどかりの里・やどかり研究所顧問 丸地信弘

### はじめに

このたび、当学会の電子会議の場で SARS 流行の危機管理に関する報告をした。当日、座長の酒井先生から度重なる質問を受けて応答をしているうちに、表記の体験記を直ちに報告するように言われた。自分の実体験だから、簡単に応えて会期中の掲示板に載せたのが契機になり、次はニュース・レター用に投稿して欲しいと言われた。

実は私と酒井先生は三十年前に大学で同じ教室員同志であり、今回の話も気楽に引き受けた。もっとも、彼は電子会議の場で私を予防医学者と扱ってくれたが、今そう呼ばれるのに私は少し違和感がある。

しかし、それはまあ良いとして、私が北京でどうして SARS と関係したかお話して置かないと、知らない人には趣旨が通じないだろう。私と中国との繋がりには十五年ほどあり、特に河北医科大学で数回は医学教育の改革に繋がるセミナーやワークショップを開いており、信州で教育した数名の愛弟子もいる。

その一人が四月十日に急に電話を掛けてきて、北京で SARS が発生したが、北京の首都医科大学の教育改革の会議に出て意見を述べて欲しいという。この大学は地域指向の医学教育をしているのを承知していたので、私がタイで協力してきた仕事と同じだと判断し、SARS の件はすこし気になったが、四月十七日に出向くことにした。

なお、私は過去三十年間に東南アジア諸国に足繁く出向いており、普通の人より伝染病に対する心構えは少し高いことを念頭に置いて、以下の体験記をご覧いただきたい。

### 1. 出発前

私に電話してきた彼女は河北省でエイズ予防対策の専門家として

働いており、北京の SARS 問題があるが、来てほしいと話してきた。私もマスコミ情報で同程度の知識は持っていたが、大学改革の仕事に興味を引かれて参加すると直ちに応えた。そしたら、家内や子供、それに友人から大丈夫かと念を押されたが、注意さえすれば自分に病気が及ぶことはないと思つた。もっとも、栄養剤とビタミン C は十分に用意し、栄養剤は確実に服用したが、ビタミン C は全く使わなかった。

マスクも分量を用意したが、日本製は抗菌性があると言うが、何とも小型で日本人向きだと思つた。四月十七日に北京空港に到着したら、構内は閑散としており、検疫も通常の状態に思えた。しかし、出迎えに来た十年来の友人(通訳)はこんな静かな北京空港は見ることがないと言う。私もマスクを付けたが、未だマスクを付けている人は少数派だった。

## 2. 滞在中

日本を出る前にホテルの空調が伝染を助長しているという話を聞いたから、滞在中は意図して部屋のエアコンを入れなかった。四月の北京の朝夕は信州・松本より寒く感じたが、部屋にいる間は気にもならなかった。到着した日の夜はホテル前のレストランで仕事の関係者と会食をしたが、その段階では大勢の人で賑わっており、近辺を歩く人もほとんどマスクをしていなかった。

ところが、翌日に北京に住む知人の中国人医師と電話で話したら、入院患者の様子から、実際の患者数は新聞報道より上回るだろうと言われ、繁華街に出ないように注意を受けた。幸い、私のホテルは住宅街の中にあり、表通りは商店が並んでいても、繁華街といえない場所にあり、私どもが仕事をしたオフィスも徒歩十分内外であり、会合も十人程度、人の出入りも限られていたので、その点でも安心度は高いと思つた。なお、米国・英国・日本の学者が討論に参加すると言っていたが、何れも SARS 流行を恐れて来ないことになり、私がピンチヒッターになった。

ところが、四月二十日と思うが、北京市衛生局が患者統計を押さえていたことが暴露され、市長等が失職したニュースに接し、数日前の電話の話が納得できた。その日から、ホテルやオフィス内では

目に見えて消毒が始まり、私のオフィスも関係者に中国製の大型マスクをみんなに配布したし、彼らも事態を重大視し始め、一時は私に出来るだけ早く帰国するようという話もでた。しかし、欠航が相次ぎ、その話も沙汰止みになった。そのため、私も覚悟を決めて、注意は一層にするようにした。しかし、うがいの励行と言っても、実際は言うほど実行できないことを感じた。また、この段階になると、街を行き交う人の半分くらいはマスクを掛けるようになり、道端の会話も SARS に関する話が断然に多いと通訳の友人が言ってくれた。幸い、北京では外国人向けの英語のテレビ番組があり、私はそれをよく見したし、施設によってはNHK ニュースも少しは見れた。

仕事の総括のため、四月二十二日に首都医科大学に出向いたが、その隣は大きな伝染病専門病院で、大学で四十人単位の学生実習をそこへ送り出していたら、一人の学生が SARS に罹患し、大学当局は連日の対応策に疲労の色が隠せない様子だった。なお、そのころから院内感染による医療従事者の悩みが聞かれるようになったが、以前の中国事情を知る人ならお分かり頂けるが、今では口コミなら私たちにもいろいろな情報が早く入るようになったのは大きな変化である。

仕事も終わり、二十三日に同僚達が私のお別れパーティを立派なレストランで昼食時に開いてくれたが、その頃から食堂が閑散としはじめたのには驚いた。そして、私の中国語通訳をしてくれた友人が一足先に河北省に帰ることになり、彼がまじめな顔でこんなことを言った。それは、私が友人夫妻とその日の夕食を共にすると言っていたので、相手が共に医師だと言うから、その面会はキャンセルしなさいと真面目顔でいう。しかし、私は約束だから訪問すると言ったら、彼は変な顔をして別れることになった。彼は親切心から言ってくれたので、済まないことをしたという思いが残った。

実は、この話には後のおまけにあった。彼らの高層マンションで歓談後に予約レストランに向けて車で出かけたが、途中で駐車場のことで主人が携帯電話を入れたら、そのレストランは明日から休業だという。これは具合が悪いと別のレストランに変更したら、そこ

も大きなレストランだが来客が一人もおらず、二時間後に出るときも三組しか来客はなかった。食いしん坊の北京の人達にも SARS 騒動が急激に起きていと改めて知らされた。

帰国前日、別の私の別の愛弟子が河北省から出てきたが、冒頭に話した弟子の方は河北省でも患者が出たので、その予防対策に追われ、北京に出てくるなど困難な状況になった。そこまで、事態が北京周辺に拡大し始めたかと改めて感じた。その日の午後、彼と郊外の静かな公園周りをしたあと、夕食は何を食いたいかと言うから、好物の北京ダックだと言ったら、専門店で案内してくれたが、そこも広大な広間に数組の来客だけで、帰るときでも夜七時半というのに十組程度であった。

ホテルに戻ったら、現地での仕事の相手役が私の部屋を訪れ、いろいろ感謝の言葉を述べてくれた。それで分かったことは、ピンチヒッターの私の役割が彼らの想像以上であったと言われ、私も無理して北京へ来て良かったと思った。その満足感が後に述べる翌朝の SARS 流行の危機管理に関する着想に繋がったようだ。

### 3. 本務課題と SARS 論文の関係

この間の事情を少し説明しないと、私の本来の仕事と SARS 論文作成の関係が分からないだろう。私の本来の仕事は首都医科大学の組織改革について外部の目でコメントすることだった。沢山のことを関係者で話し合ったが、改革に着手した場合その経過と成果をどう査定するか討論が後回しになったので、私が二人三脚の自己調節モデルと四輪駆動モデルで、その基本的な考えを図示したら、彼らが異常なまでに関心を示し、前記の大学での報告会でも彼らは学長等を前にそのイメージについて強調した。要するに、前者は自律調節の基本、後者はみんなで乗り合いバスに乗らなければ共通の目的達成は出来ないとイメージを図式化して力説した。目的達成への監視体制をしっかりと組み立てようと言いたかったのだ。なお、このような話は共通感覚を表す図式モデルを交えて対話することが大切であり、過日の電子会議で酒井先生がたひたび私に質問したり、印象を述べたりしたことが生きたのであり、話し合いでお互いが軌道修正できるのである。

そんなことで仕事を終え、私はふっと SARS 騒動の渦中にいた一週間を思い出したら、SARS 流行の危機管理も同じパターン認識で理解できると直感した。そのため、帰国当日の早朝にイメージをパソコンに打ち込んだ。幸か不幸か、後記のよう帰国後の十日間は自宅監禁の状態が続いたから、その間に論文を纏める仕事に専念し、「災いを転じて福と成す」努力をした。すなわち、大学改革は査定体制、SARS は危機管理であり、人間中心の自律性を意識したら、両者は硬貨の表裏の関係と知ったことが「発想の転換」になり、それが過日の電子会議の発表になった。

さて、二十五日の帰国に際し、前記の夫婦の特別の計らいで早朝に自家用車で空港まで送ってもらったが、タクシーは SARS 罹患のリスクが高いと主人は言っていた。なお、往復とも China Air を使ったが、何れも三十人程度しか乗客はおらず、特に帰りの便では殆どの人がマスクを着用していた。

#### 4. 帰国後

北京を出る前に成田では検査が厳しいという話を聞いてたが、私が関空に到着してみたら、通常と変わらない検疫体制のように映り、少し拍子抜けした。

帰国して一安心と思ったら、看護資格のある家内は衣類の洗濯と私の身体状況のチェックを十日間も続けたので、この自宅監禁状態が私にとっては最大に苦痛であった。SARS は高熱が特徴と言われ、自分も熱があるような錯覚に駆られ、その心理的な圧迫は確かにあった。そして、家内は私が日本で最初の SARS 患者になったら面目が潰れると必死だったが、私の方は何故か心は座っていたのは不思議である。

なお、杭州から北京の会議にかけつけた医学教育の専門家は一足先の二十二日に帰郷しましたが、何の便りもないので変だと思っていたら、郷里の空港に着いたその足で近くの隔離施設に十四日ほど収容され、五月五日にやっと解放されたと知らせてきた。その点、河北省から北京に出てきた二人の友人は自宅待機を一週間ほど大学から命じられたとメッセージを寄せてくれ、杭州と河北省の意識差を強く感じた。

確かに、今回は予想外の体験であり、大変だったが、私の場合は「転んでも唯では起きない」気持ちで SARS 流行の危機管理に関する新しい論文も出来たから、結果としては収穫が大きかった。もっとも、家内にそのことを話したら、とんでもない話だと罵倒され、西宮にすむ長女からも相当に悪く言われた。しかし、私には今回の経験は一石二鳥の忘れ得ぬ出来事になったのは確かである。

以上